

# 多民族国家における社会変動と アイデンティティ・クライシス

森 岡 修 一

## はじめに

本稿は、多民族国家ロシアにおけるエスニシティと社会変動、および青年のキャリア・プランの問題を中心に、社会化の過程におけるアイデンティティ・クライシスを考察しようとするものである。周知のように、ソ連邦の崩壊と CIS の誕生によってロシアのすべての社会的位相におけるエスニック・アイデンティティは根本的に解体・再編され、現在もなおサミットでのロシア参入に伴う G 8 新体制化にむけて新たな国家的アイデンティティを模索しつつある。海外の研究者については言うに及ばず、わが国のごく一部の研究者に限ってみても、現代ロシアの国家的アイデンティティに対する研究のアプローチや評価は多種多様であり、その課題を論ずること自体が多くの困難を伴うことを示している。

たとえば袴田茂樹は、歴史的価値やシンボルへの回帰、近代合理主義の導入による市場化と民主化の推進、欧米との協調と接近、といった3つのベクトルの調和に「アイデンティティ」解決の糸口を求めようとしており、塩川伸明は「多方法的接近」によって社会主義の全体像に迫る試みを行っている。また、関啓子は個人個人の人間形成に寄り添いながら、その移り変わりの人間史をアイデンティティ形成に焦点を当てて描き出し、一定の成果を収めている。前2者をマクロ的アプローチとすれば、後者はミクロ的アプローチに近い学問的スタンスと見ることも可能であるが、本稿では、これらの成果に学びつつも独自の手法で標記の課題を論じていきたい。いわば、社会と個人との中間的視座からアイデンティティ・クライシスの問題に迫ってみたいと考える。そこでまず、わが国と多民族国家とのアイデンティティの対比に着目した比較文化（通文化）論的視点を提供することによって、アイデンティティ形成の基本的な問題点の考察から論を始めよう。

## アイデンティティ・クライシスに対する比較文化論的視点

まず、わが国の若者を例にとりながらアイデンティティ・クライシスの実態と問題点について具体的に検討することにした。朝日新聞世論調査室は、1946年から長期にわたって「生活の満足度」と「社会をあらわす言葉」の全国調査を毎年行っているが、近年では「混乱」「不公平」「身勝手」といったネガティブ・イメージの強いキーワードが常に上位を占めており、わが国の経済的停滞と政治的混乱をそこに読み取ることができる。若者のあいだに社会的引きこもりやモラトリアム、あるいはさらに「おとなになりたくない」症候群（いわゆるピーターパン・シンドロム）が激増していることは、国家が子どもに対してしかるべきモデルを提示できず、アイデンティティ

形成の機会を奪っていることを明白に示している。

このことを裏書きするように世界の青年意識調査は、日本の青年の特色として「漠然たる不安」「人間への不信感」「国家社会に対する大きな不満」「母子の高い密着度と愛情飢餓の潜在的傾向」などをあげており、これらはいずれもアイデンティティ・クライシスの問題と深く絡み合っている。歌手の長渕剛が『とんぼ』の中で歌った「俺は俺であり続けたい」という心象風景は、近代化された「都市」という異界の中で懸命にアイデンティティを求めようとする青年期の典型的な姿である。

1977年に芥川賞を受賞した三田誠広の『僕って何』はまさに、この問題を正面から扱った興味深い作品であるが、社会学者のパーソンズ流に言えば、同作品においては愛情やアイデンティティを求める目標達成の要求や、準拠集団を求める統合の要求が頻繁に見られるのに対し、手段的適応の要求や究極的価値への要求はあまり見られず、そのためにこの主人公は、アイデンティティ拡散のままに自我を分裂させていく。しかも興味深いことに、主人公は最終的には母性の象徴としての「電気釜」によってアイデンティティを侵食され、モラトリアムの泥沼に陥っていくのである。これは、河合隼雄の言う「永遠の少年型の母性」論などの日本文化論と通じるところが多い。

このところわが国では「父性復権論」が盛んであるが、そのあたりの事情はロシアも同様であり、とりわけ、現在のアイデンティティ・クライシスを乗り越えるために待望されている強き祖国ロシアのイメージとして「父親」の果たす役割は重要である。その理由は、ロシア語の「祖国」(Отечество)がロシア語の父親(Отец)と語源的に同根である、ということで容易に説明できるが、その点で、現代ロシアの国家的アイデンティティ復権のイメージは「母国」(Родина)のニュアンスよりも「祖国」(Отечество)に近いと言えるだろう。

さらにわが国では、アイデンティティ・クライシスと密接な関係にあるといわれるモラトリアムの問題も、今や青年期だけのものではなくなった。三田誠広が芥川賞を受賞したその年に、「なぜ死に急ぐ子ども」というショッキングな見出しの新聞記事(『朝日新聞』1977年10月16日)が大きな話題になった。その記事の概要は、小学校の1年生に「みんな早く大きくなりたいでしょう」と質問したところ、多くの子どもが大きくなりたいと答え、その理由として「勉強がふえるから」とか「おとなは大変そうだから」という答にまじって「お母さんのおなかにいる時が一番良かった」という子どもがいたことや、大きくなりたい時には「自殺すればいい。天国では大きくならないから」という理由を述べた子どもがいたというのである。これはまさに「ピーターパン・シンドロム」の典型的なものであるが、今から20年以上も前に、わが国ではすでにこのような現象が社会問題化しつつあったことを忘れてはなるまい。次の新聞の投書を見てみよう。

「暗い顔の大人 子供でいたい」

— 私は大人になりたくない。もう高校生で、はたちになるまでたったの4年しか残されていない。世の中は決して明るい方向に向かっているとも思えず、今、大人である人々が楽しそうに見えるかというと、正直なところ私にはそうは見えない。(略)私は子どもであり続けたい。能天気だといわれようとも、今日と明日のことだけを考えて暮らしたい。(略)—

この投書は、1996年19月13日付の朝日新聞「若い世代」欄に掲載されたものであるが、同文において16歳のこの女子高校生は、いじめで自殺した子どもに対しても「私の目に一瞬、うらやましく映る」と言ってみたり、「自分たちが汚したものを子どもたちにしりぬぐいさせようというのですか?」とおとなを批判したりもしている。投書内容の是非についてはともかく、ここには、おとなの世界を不信の目でしか見ることでできない若者のアイデンティティ・クライシスの一端を窺うことができるだろう。

海外との比較調査でも、こうした「退行」願望が報告されてしばしば問題になっている。たとえ



ばベネッセ教育研究所の調査では、東京、上海・ソウル、ロンドン、ニューヨークの子どものうち、猛烈な受験勉強に明け暮れるソウルの子どもの3割以上が「退行」願望を持ち、次いで東京と上海の子どもの2割以上、ロンドン、ニューヨークでは1割以下となっている。

一方「いつまでも子どものままでいたい」の願望の最も少ないのは上海である。「早くおとなになりたい」願望の最低は東京で約4割、次いでソウルとなっているが、上海は早くおとなになりたい願望が6割を超える。ここには、相対的に、元気で早くおとなになりたい上海の子ども、受験競争に疲れ果てて、幼児期にもどるかおとなになって、一刻もこの状態から抜け出したいソウルの子どもの、そして、いつまでも子どものままでいるか幼い頃にもどるかして、できればおとなにはなりたくない日本の子どもたちの実態が浮かび上がってくる。特にわが国の子どもたちには、かなり早くからモラトリアム願望や退行願望がみられることが特徴といえよう。わが国における他の調査では、年齢が上がるにしたがって（特に中学受験、高校受験の時期に）、大学生になりたい子どもだけが急増しているという事実は、子どもの目に大学生が最も気楽に映っていることを裏付けている、いかにも皮肉な結果といわざるを得ない。

エリクソンの指摘するところによれば、もともと、「徳」(Virtue)は、個人あるいは集団の自己保存を保障する意図を持つものであったのに、滅亡への時代錯誤的恐怖の圧力のもとに硬化してしまっており、変化する必要性に対応できなくなってしまう。「これこそ、人間の進化の最もパラドクシカルな問題のひとつである」との彼の指摘は、物質的には何不自由のない現代の日本の子どもの多くが、アイデンティティ喪失と道徳的頹廃に陥っている状況を思う時、ひときわリアリティをもってわれわれに迫ってくるのである。

それでは現在の中学生は、どのような人生設計と目標を「よい」ものとして描いているのであろうか。日本青少年研究所が行った調査では、わが国の中学生の間で最も重要視されているのは「幸福な家庭生活」、次いで「趣味にあった暮らし」「経済的に豊かな生活」「社会のために役立つ」「のんびり気楽に暮らす」の順になっていて、「高い社会的地位」は全く人気が無く調査項目で最低である。同調査ではアメリカと中国との比較調査も行っているが、アメリカの中学生は、ほぼ半数が「高い社会的地位」を重要と考えていることや、中国では、6割以上が「社会のために役立つ」ことを人生目標として重要視しているなど、興味深い結果が得られている。

この結果を、日本生産性本部と日本経済青年協議会が新入社員に対して調査した「働くことの意識」と比較してみよう。「働く目的」の上位3位は、「楽しい生活をしたい」「経済的に豊かな生活を送りたい」「自分の能力を試す生き方をしたい」となっており、「社会のために役に立ちたい」はわずか4%たらずである。これは前述の中学生の価値観と酷似していることが明白である。つまり現代人は、かつてのような刻苦勉励、臥薪嘗胆的な立身出世談をはっきりと退け、のんびりと楽しく暮らす、マイホーム的やや自閉的な「ささやかな幸せ」を夢見ているのである。

「努力すれば何とかなる」社会から「努力しても仕方がない」社会へ、そして「努力する気にならない」社会へ——これは戦後日本の半世紀の変化を表した、ある学者のことばだが、現代の子どもたちの心象風景を巧みに言いあらわしていると言えよう。20世紀末から今世紀初頭にかけて、わが国では新学習指導要領の実施による学力低下と学力格差の問題がマスコミを賑わすようになったが、それを裏付けるように刈谷剛彦らの調査では、学校外で全く勉強しない中・高生が3割以上にのぼることが明らかになった。一方で3-4時間以上勉強する生徒も1割近くおり、こうした事実的データをもとに、学力格差と階層分化が連動して論じられるようになったのもこの頃からである。

このように社会変動とアイデンティティは深く結びつきながら、その時代の流れを反映した独自

のクライシス現象を生み出していく。先ほど述べてきたアイデンティティ・クライシスの現象はモダンからポストモダン（生産の英雄から消費の英雄へ）、さらにはポストモダン以降の社会の動向（消費の英雄から新たなタイプの英雄へ）を端的に反映した「社会化」過程の位相に位置づけることができるだろう。つまり、ことは「心がけ」「心の持ちよう」といった個人的レベルでの問題ではなくて、経済的・政治的な動向をも包摂したきわめて重要な社会（病理）的現象の指標と位置づけるべきなのである。時代は、その流れに応じて少数の「英雄」と、圧倒的多数の「非英雄」の人々を日々量産していく。その意味で、アイデンティティ・クライシスはいつの時代にも常に姿を変えながら、「英雄」と「非英雄」の狭間に出没する、いわば時代の「黒衣」である。

### アイデンティティ形成の諸要因

総務庁は1972年以降、5年ごとに青年意識の国際比較調査を行ってきたが、98年2月から6月に行われた第6回の同調査では、日本を含む11カ国（日・米・英・独・仏・スウェーデン・韓国・フィリピン・タイ・ブラジル・ロシア）の18歳から24歳までの青年（被調査者数は各国約1000名）を対象に調査員による個別面接方式で、「家庭」「学校」「職業」「友人・地域、余暇」「国家・社会」「人生観」関係の調査が行われた。それらの項目はいずれも青年の実態を知る上で興味深い内容となっているが、ここではロシアの青少年のアイデンティティ・クライシスに関連する部分のみを取り上げることにしたい。

まず、「自国の社会で最も大きな問題は何か」という質問に「学歴社会」が上位に入っている国は、日本、韓国、フィリピン、タイといったアジア諸国であり、ロシアの青年において「学歴」問題は上位5位までには顔を出していない。しかし、それはロシアに学歴問題がないということの意味するのではなく、逆に学歴自体がしかるべき権威の象徴性を失い、新たに深刻な問題が生じたことを意味する。ロシアの青年の多くが社会問題としてあげたものは、「貧富の差」「就職難・失業」「正しいことが通らない」「まじめな者が報われない」「治安の乱れ」であるが、これらの項目はいずれも、若者のアイデンティティ・クライシスの主要因と考えられるものである。

青年のアイデンティティを規定する構成要素は、＜図. 1＞ ＜図. 2＞のようにモデル化することができる。さらに、それらの下位成分を差異化の指標で整理してみると＜表. 1＞のようになるだろう。前者においてはアイデンティティ形成のメカニズムが、また後者においてはその形成される「場」が示されている。一人一人のアイデンティティのありようも、またそのクライシスの様態も多種多様であることの理由が、これらによって示されるであろう。仕事にアイデンティティを感



図1 アイデンティティ形成のメカニズム



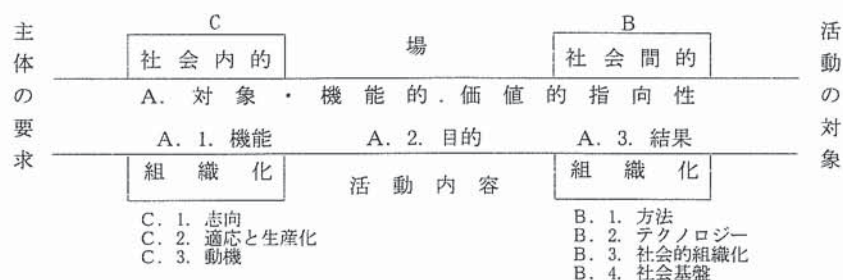


図2 アイデンティティの規定要因

表1 アイデンティティ形成の諸領域

活動の種類		社会的規則	制度	位相
生産活動（物質的・精神的）	直接的な労働活動	第一の生活的要求への労働の転化 生活・労働条件の改善 国民の社会的自己管理の形式の発達	経済 テクノロジー 科学  政治 法	就業；労働の条件，性格，内容，所得  国家・社会組織の活動への参加
	生産管理と関連した社会・政治的活動			
生産外活動	生産管理と関連しない社会・政治的活動 レクリエーションを含む社会・日常活動	同  福祉の向上	同  家庭 サービス領域	社会的安全  家事，勤務外時間と休息，収入と支出，住宅事情
	社会・文化的活動	調和的に発達した人格の形成；社会の精神的価値に対する大衆の関与	教育 文化 スポーツ	教育・科学・文化・芸術・スポーツの利用，余暇
	再生産活動	出生の増加，死亡の低下，生活の活動期間の増加	家族 保健	結婚，離婚，出生数，健康，病氣，訓育，個人の社会化

じる人もいれば、趣味に没頭することによってのみ「自分らしさ」を感じる人もいるのである。また、仕事が生きがいといってもその理由は、「金」「仕事の内容」「職場の人間関係」等々複合的、成層的であり、さらには本人のさまざまな社会的役割に応じて、システム相互にコンフリクトが生じることも少なくない。かくして、アイデンティティ・クライシスとは、本人が最も力点を置いていた部分の準拠枠が崩れたり、準拠枠のシステム相互にコンフリクトが生ずるなどして危機的状況に陥ったときに訪れる、精神的に不安定な閉塞状況をさす。

#### ロシアにおけるアイデンティティ・クライシス

ソ連邦が崩壊し新生ロシアが誕生して、すでに10年以上が経過した。バルト3国はCISに加入せず独自の路線を歩んでいるが、他の旧ソ連邦諸国はそれまでの版図をほぼ継承した。とはいっても、かつての「パックス・ソヴィエチカ」はすでに遥か過去のものとなりつつあり、経済、民族問題をはじめロシアの求心力低下による構成国の結束力の弱体化が、さまざまな社会問題を露呈させるに至った。青年のアイデンティティ・クライシスは、まさにその社会問題の典型ともいえるもの

であるが、その論を起こすにあたって興味深い数字を挙げておきたいと思う。

「全ロ世論調査センター」が、2001年8月におこなったアンケート調査では、「国家は教育に対してしかるべき配慮をしていると思いますか」という質問に対して「十分に配慮している」と答えたのはわずか11%で、圧倒的多数の82%が不十分と回答している。（7%はN.A）また「ソビエト時代と現在のロシアを比べてどちらの教育の質が高いか」の質問に対しては、「悪くなった」がほぼ半数の49%、「良くなった」（21%）と「同じ」（19%）がほぼ2割ずつで評価を2分している。（N.Aは11%）同様の設問が高等教育に関しても出されているが、ほぼ同軌の傾向となっている。「悪くなった」（46%）「良くなった」（19%）「同じ」（15%）N.A（20%）。「ロシアの高等教育のレベルは世界の水準と比べてどうか」という質問では「低い」が最も多く35%、「同じ」が24%、「高い」はわずか15%しかない。

高等教育を受けることについては74%が重要と答えており、重要でないとしたのは23%にとどまるが、高等教育を受ける理由については「就職のため」と「物質的保障」がともに約3割で最も多く、「自己実現」は2割しかない。次いで地位、出世がほぼ1割と実利的動機が圧倒的に多い。「できるだけはやく働くと、勉強するのではちらが大事か」という質問では、さすがに「勉強」（63%）が「仕事」（13%）を上回る。ところが親に対する質問では、きわめて興味深い結果が出ている。勉強を続けることに関しては、大都市よりも村落のほうがポイントが高く、巨大都市で54%、大都市56%、小都市61%、村落で65%のように、通常とは別様の逆転現象が見られるのである。

周知のように、政局はゴルバチョフからエリツィンへと政権が交代し、ロシアの政治・経済体制は混乱の度を加え、ついにプーチン政権の誕生となったわけだが、それらの政策的危機を科学的社会主義の理論的過誤に帰すべきか否か、また社会民主主義や資本主義は「市場経済」との関係でどう評価されるべきか、といった問題は新たな現実的課題を「社会主義」に突きつける結果となり、多くの論議を呼ぶことになった。

このいわゆる「脱社会主義」教育の傾向が近年ますます顕著となるに伴い、一部の新エリート層やいわゆる「ニューリッチ」は別としても、多くのロシア住民の間に大きな経済的不安と文化的アイデンティティ・クライシス、新たなロシアの「ロシア問題」といった現象が広がりつつある。現在、ロシア住民の間で増大しつつある「伝統的にロシア的なもの」への回帰傾向は、かつてのような民族的な誇りではなく、何よりも（非ロシア人に対する）ロシア民族としての「不安」がその底流を成している。回帰的なアイデンティティ志向は、実はアイデンティティ・クライシスの端的な徴表なのである。

最近のアンケート調査の回答を見ても、ロシア人が目指すべき価値として「ソビエト的なもの」（換言すれば社会主義的、あるいは共産主義的なもの）や「西洋的なもの」よりも、かつての絶対的権力の「帝政」イメージの色濃い「伝統的にロシア的なもの」の方に遙かに高いポイントを与えていることが、何よりもそのあたりの事情を雄弁に物語っているといえるだろう。「大国ロシアの復活」を掲げて当選し、中央政府の求心力回復を目指すプーチンが依然として驚異的な支持率を誇っているのは、今述べたことと深く関わっている。

エスニック・アイデンティティは、おおそ虚無派、無関心派、積極派（規範的）、過激派等のタイプに類別できる。このうち虚無派と過激派の両極は、エスニック・アイデンティティの危機的状況といえるだろう。後者には民族的エゴイズムや孤立主義、熱狂的愛国主義などが含まれる。このうち望ましいのはもちろん積極派（規範的）であるが、基幹民族では平均して77%がこれに属し、ロシア人では86%に達している。だが民族間の緊張度の高い北オセチヤ（アラニヤ）では、オセッ



ト人、ロシア人ともに過激派の占める率が相対的に高い。

社会的距離においては当然グループ間の差がみられるが、たとえば積極派（規範）と孤立主義とを比較してみると以下のようなになる。（括弧内は、積極派／過激派の％）。自民族の市民として受容（80％／81％）、隣人として（72／64）、自分の子どもの配偶者として（35／18）、自分の配偶者として（29／17）。これをみると、孤立主義者の方が後者になればなるほどポイントが急減していることがはっきりと窺える。学歴、職種、年齢といった要素がこれらには作用しており、高学歴社や都市住民、若年層には「規範」タイプが多い傾向がみられる。

ここで、「社会・経済的領域と民族関係の領域における肯定的・否定的傾向」についてみておこう。過去にはさまざまな経緯があったにもかかわらず、問題は過去よりも現在、そして主として社会・経済的関係にありとするエスニック・グループが多い。しかしトゥバでは、基幹民族もロシア人も65％が民族間の否定的感情を体験している。一方、北オセチヤ（アラニヤ）では基幹民族のオセット人とロシア人の評価がほぼ一致しており、両者の関係についてはおおむね肯定的である。ロシア人にとっても否定的体験は避けることができないが、それを乗り越える方法といえば移民についての決定を受け入れることしかない。

それでは、否定的体験はどのようにして処理（克服、回避、あるいは合理化）されるのであろうか。たとえば、他のエスニック・グループからの攻撃を受けたときの対処法については、基幹民族の個人的レベルでは、サハ以外では「非攻撃的反応」が最も多く約半数に達するが、サハでは「報復」の方が「非攻撃的反応」を上回る。「抑制」は20％をやや上回る程度で差がみられない。ロシア人においてもこの傾向にはあまり変わりがない。僅かに北オセチヤ（アラニヤ）で「非攻撃的反応」「抑制」「報復」の順に入れ替わっている程度の違いがあるのみである。

民族間の相互理解の役割を果たすエイジェントを「仲介人」とよぶならば、いずれの地域の基幹民族においても積極的「仲介人」が5割以上を占める。これはロシア人もほぼ同軌であるが、強制移住させられたロシア人のみは例外で、「積極的仲介人」は4割足らずとなり、「消極的仲介人」「積極的非ロシア人」「消極的非ロシア人」「民族嫌悪」がいずれもほぼ2割近くを占めるようになる。これまで「ロシア人」を表すロシア語は、もっぱら民族のリネージに基づいた狭義の「ルースキー」＜Русский＞が用いられ、多民族を1つの国家に包摂する「ロシヤニン」＜Россиянин＞は雅語、もしくは廃語としてほとんど用いられてこなかったのだが、最近では頻繁に目にするようになった。大ロシア主義的なニュアンスの「ルースキー」を避け、「ロシヤニン」を敢えて用いようとする政治的配慮の背後には、今述べた非ロシア民族の新しい（ある意味では危険な）ナショナリズムの台頭が伏在しているのである。

一方、非ロシア人のナショナリズムに関しては、A.「古典的」ナショナリズム（チェチェンなど。またタタールの過激な民族運動）、B.「対等的」ナショナリズム（タタルスタン、トゥバ、バシコルトスタンなど）、C.「経済的」ナショナリズム（サハなど）、D.「防衛・自衛的」ナショナリズム（北オセチヤなど）が析出されたが、特にタタルスタンの一部等には、経済変動と結びついた複合的なE.「近代化された」ナショナリズム、とでも言うべき新しいエスニック・アイデンティティの基本型が観察されており、文化的同化過程に関与的であることが窺われる。100人を超す犠牲者を出した、2002年10月と12月のチェチェン武装勢力による爆破テロ事件は、まさに古典的ナショナリズムの位相におけるエスニック・コンフリクトの集中的表現であったといえることができるだろう。

## 青年のキャリア・プランとアイデンティティ

このような政治・文化的動向と連動して、一般市民の価値観はむろんのこと、青少年の間にも「脱社会主義」「脱イデオロギー」的価値観が急速に広まってきており、彼らの教育・職業観にも大きな変化が生じている。たとえば、2000年の大学新入生に最も人気のあった職種の上位5種は、1. 企業経営者、2. 経理人、3. 監査役、4. 法律家・弁護士、5. セールスマネージャー、マーケティングマネージャーとなっており、これが現代のロシアの若者における「職業的威信評価」とみなされる。1950年（医者、科学者、技術者、工場管理者、職長）、1964年（物理学者、パイロット、医者、建築技師、教授）、1971年（法律家、知的創作家、医者、物理学者、電気技師）等と比較してみると、職業的威信評価とキャリア・プラン（「将来いかなる職業に就こうとするのか、またいかなる社会的地位を獲得しようとするのか、についての主観的期待」M.Kh.Titma）の変化が明確に窺われる。

学生のアスピレーションを＜専門志向＞＜人間志向＞＜地位志向＞にカテゴライズするならば、かつて優勢であった＜専門志向＞＜人間志向＞型は後景に退き、現代の学生にあっては＜専門・地位＞複合型とでもいうべき実利型が上位を占めるようになった。つまり、彼らのアスピレーションは「富」「収入」の指標によって大きく規定されているということである。換言すれば、国家はこうした若者のキャリア・プランのアスピレーションと保護者の教育要求に応えることなしには、その教育システム自体「責任」を果たすことができないということになる。

旧ソ連邦から新生 CIS への転換期には、青少年のキャリア・プランの矛盾が噴出したが、これは単に教育固有の問題ではなく、社会主義国家としての政治的・経済的矛盾の集中的表現と読みとるべきであろう。旧ソ連邦時代にはキャリア・プランと現実との齟齬が著しく、特に多かったのが大学での専攻と職種との不一致であり、ほぼ1/3が「自分の専門にあった仕事がないために、不本意な職種に就かざるを得なかった」と回答している。連邦崩壊期には大学を中退してまで「露天商」（外国人を相手にドルで商品を売る）や「受付屋」（外資系ショップ周辺にたむろして客の代わりに行列に並んで手数料を取る）などの新「職業」につきたがる若者が激増したが、これらは何を意味するのだろうか。

その主な理由として、ソ連の社会システムや教育システムが将来を託すべき青少年に対して、自ら「クーラー」（cooler；冷却者）となって、彼らの向学心やアスピレーションをクール・アウトする役割を演じていたことが考えられる。つまりそれは「希望やあてにしていたことが実現されなかったことから恨みや反逆することのないようにし、従属的地位や役割への献身を持続させる過程」（竹内洋）なのである。しかもこうしたクール・アウトの過程はソ連邦崩壊とともに突如として現れたものではなく、ポリテフニズムをはじめとする「教育と生活の結合」、あるいは「教育と労働との結合」といった旧ソ連邦の社会主義の中核を占めていた教育の理念とテーゼが、現実と大きく乖離するものであり、現実の教育政策としてはすでに破綻していたことを意味するのである。何よりも国家が、若者のアスピレーションを冷却することのないような安定した経済システムを実現できなかった、という責任は大きい。

現在では「建前」と「本音」の距離が縮まり、実利志向が顕著になってきている。それだけに経済格差はますます増大しており、犯罪も多発している。その点で、2001年10月にモスクワで起きた殺人事件は象徴的である。定職に就けないロシア人グループがカフカス移民労働者3人を殺害した、というもののだが、ここには経済的アンバランスとエスニック・コンフリクトの融合した新しい



社会現象が観察される。つまり「富裕／貧困」と「ロシア／非ロシア」のダイアドにおける対立が、こうしたかたちで日常化してきているのである。しかも、ロシア人と非ロシア人の貧富が逆転する現象も珍しくないことを忘れてはならない。

コヴァレヴァは、モスクワ在住の中・高年齢層を対象に、価値志向性に関連する99年と79年との比較調査を行っているが、それによると、両調査時点の20年間で最も大きな差を見せているのが「生産での労働、勤務」である。79年には第2位であった当該項目は、99年には第10位にまで転落してしまっている。年配層においてすらこの激変ぶりなのであるから、若年層にさらに大きな変化が生じていたとしてもなんら不思議ではない。

99年、モスクワの自治管区ゼレノグラードにおいて、スクリプトゥノヴァとモロゾフが12歳から29歳の若者に対する生活意識調査をおこなっているが、それによればいずれの年齢別コーホートでも、就業者においては「社会、国家」「仕事」に対する満足度が最も低く、前者に対しては40.1%、後者で19.3%の高い「不満」指数を示している。また、12歳から25歳までの3歳ごとの年齢別コーホートすべてにおいて、「仕事、就職」に対する将来の不安感が最大値を示しているが、26—29歳のコーホートでは「社会、国家」と「健康」が最大の不安要因となっているのは、これまで述べてきたことすべてを何よりも雄弁に物語っているといつてよい。つまり、先ほど述べてきたエスニック・コンフリクトが一方の深刻なアイデンティティ・クライシスのA極であるとすれば、経済問題と直接かかわりをもつ「仕事、就職」「健康」問題が、彼らのもう一方のアイデンティティ・クライシスのB極を成しているのである。しかも、このAとBの両極は相互に密接不可分に絡み合い、青少年のアイデンティティ・クライシスをいっそう複雑かつ深刻なものにして「社会、国家」に対する不満を募らせる結果となっている。

### ロシア人と非ロシア人のアイデンティティ・クライシス

たとえば、ペレストロイカ以前にあってはロシア人と非ロシア人とのエスニック・コンフリクトは、一般に前者の圧倒的優位という図式の中で先鋭化していた。大都市ほどロシア人の流入および居住比率が高く、かつ特定地区への集中（いわゆる「棲み分け」や「セグリゲーション」）が顕著であると同時に、非ロシア人に比べてロシア人の専門職継承率のほうが高かった。このことは、都市化によって学歴の選別機能がいっそう強化され、ロシア語運用能力や学歴によるエスニック・社会的同質性が促進されるとともに、高学歴者では非ロシア人よりロシア人の都会での階層上昇機会が大きかった、ということを意味する。青年のアイデンティティ・クライシスも、当然のことながらキャリア・プランにおけるロシア人優位に起因するところが多かった。ところが、ペレストロイカ以降はこの図式が完全に逆転し、非ロシア人の「逆襲」が始まった。民族語による「言語法」の制定などはその最たるものであり、非ロシア人による逆差別が進行して、「マイノリティ」と化したロシア人青年の間に深刻なアイデンティティ・クライシスを引き起こすに至ったのである。

そこで、ロシア人とタタール人を比較しつつ、この過程を見ていこう。＜表・2＞は、ペレストロイカ以前のタタール自治共和国の首都カザン、および石油精製工業都市として有名なアリメティエフスク、そしてメンゼリンスクの3地域における「父親—本人—子ども」の3世代間の職業ステータスの相互関係を示したものである。労働活動を始めた時点で、父親と同じ社会的地位にあった者の比率を、年齢グループごとにロシア人とタタール人で比較してみると、高等教育を受けた熟練労働者やインテリの地位の継承は、（カザンの21歳以下を除けば）タタール人よりもロシア人において、より集中的に行われている。カザンとメンゼリンスクのタタール人の社会グループでは、

専門教育を受けていない事務職の継承が圧倒的に多い。29歳以下のタタール人はロシア人よりも、非熟練労働者の職を継承する率のはるかに高い。

＜表．2＞において上段がロシア人、下段がタタール人の職業継承率（変動率）を示しており、社会・職業グループの欄は相対的に社会的ステータスの低い肉体労働者のグループから、表の下部になるほどステータスの高い知識労働者になるよう配列されているが、肉体労働者にタタール人が多く、知識労働者にロシア人が多いことがこの表から明らかである。

特に注目したいのは、中度熟練専門家、高度熟練専門家、高度班指導者の3つのグループである。カザンではこの3つのグループの合計は、ロシア人対タタール人比が老世代では12.2%対10.7%でその差はさほど大きくないが、壮年では19.1対16.4とその差を広げ、さらに若年層では27.4対13.6という2倍以上の格差になっていて、首都では特に若い世代のタタール人における階層間の上昇機会が少ないことがわかる。カザンでは、高等教育を必要とする専門家になる機会は子どもの場合、父親の1/3にまで減少してしまうのである。

この開きは都市規模が小さくなるにつれて縮まるが、同様のロシア人優勢の傾向は、学歴別によるロシア人とタタール人との相互関係において「父親—母親—本人」の学歴を比較した＜表．3＞からいっそう明らかとなる。（＋）はロシア人がタタール人の学歴を上回った場合、（－）はロシア人の学歴がタタール人の学歴を下回った場合を示しているが、高等教育修了者（あるいは未了者）レベルではいずれも大都市で（＋）となっており、都市規模が大きくなるほどロシア人の学歴がタタール人より優勢となる。こうした階層継承率の動向の背景には、上昇移動の機会が小さくなるとインテリが有利な地位を保つための、自己再生産の動きを強めるメカニズムが働いていることも見逃せない。このように、ペレストロイカ以前の時点ではすべてにおいてロシア人が優位に立ち、青年のアイデンティティ・クライシスは主としてロシア人に対する非ロシア人の不平等感に起因するものが多かったのである。

表2 3世代間の職業ステータスの相互関係

社会・職業グループ	父 親			本 人			息 子		
	K	A	M	K	A	M	K	A	M
自 営 農 民	28.1 38.2	44.1 46.2	40.5 41.7	0.4 0.7	0.3 0.5	0.6 0.7	0 0	0 0	0 0
コルホーズ、ソホーズ農民	6.3 10.0	14.3 14.4	15.2 21.8	5.1 14.3	21.1 26.2	19.9 35.8	0 0	1.1 0	1.2 0
非熟練肉体労働者	12.6 10.4	8.3 7.8	13.8 8.5	8.1 9.7	10.7 12.0	14.4 16.4	4.3 1.4	3.2 3.1	6.8 8.5
中・高度熟練肉体労働者	22.6 13.3	13.3 9.1	9.5 7.2	62.6 53.3	54.8 46.2	48.6 28.3	44.1 57.6	63.5 56.3	53.0 44.1
事務員—非専門家	4.0 6.5	3.0 3.2	3.6 3.9	2.2 3.6	0.3 1.1	2.2 3.7	0 1.4	0 1.3	0 0
中度熟練専門家	5.6 4.6	3.3 3.1	3.6 3.6	8.8 8.2	5.3 8.2	6.7 11.2	10.2 2.6	4.4 0	9.1 6.8
高度熟練専門家	5.4 5.0	2.4 3.5	2.5 5.4	9.9 8.0	5.6 2.5	4.4 3.0	17.2 11.0	7.5 6.5	5.6 8.5
高度班指導者	1.2 1.1	1.1 1.9	1.8 1.2	0.4 0.2	0 0.3	0.6 0.7	0 0	0 0	0 0
そ の 他	14.2 10.9	10.2 10.8	9.5 6.7	2.5 2.0	1.9 3.0	2.6 0.2	24.2 26.0	20.3 31.0	24.3 32.1

K—カザン、A—アリメテイエフスク、M—メンゼリンスク  
0はデータ欠如または数量化不能をあらわす。

ロシア人  
タタール人



表3 学歴別によるロシア人とタタール人の相互比較

学 歴	父 親			本 人			息 子		
	K	A	M	K	A	M	K	A	M
小 学 校 卒	-9.8	-0.3	+8.5	-7.4	+2.2	+4.4	-1.4	+1.0	+3.2
中 学 校 卒	+6.3	-1.1	-6.1	+4.1	-3.4	-7.0	-3.7	-4.6	-6.3
高 等 教 育 未 了 者	+1.4	+0.6	-2.1	+2.2	+0.7	+2.2	+3.8	+3.4	+3.3
高 等 教 育 修 了 者	+2.1	+0.8	-0.3	+1.1	+0.5	+0.4	+1.3	+0.2	-0.2

当該学歴においてロシア人がタタール人を上回る場合は+、タタール人がロシア人を上回る場合は-

表4 異民族の環境下における若者の自己実現の可能性  
(尺度7での平均相関)

自己実現 の可能性	ロシア全体での居住者		タタルスタンでの居住者	
	ロシア人	タタール人	ロシア人	タタール人
技能資格の向上	2.34	2.37	1.61	2.38
昇給	1.79	2.10	1.05	2.22
出世（キャリア）	1.78	1.85	1.13	1.98
儲け（利益）	1.48	1.41	1.05	1.47

次に、ペレストロイカ以降の青年の自己実現の動向についてみていこう。＜表4＞はロシア全体、およびタタルスタンに居住するロシア人とタタール人の若者における自己実現の比率を、スケール7のうちのポイントで示したものであるが、全体的にかなり低い自己実現率である。さらに、ロシア居住のロシア人における「儲け（利益）」がわずかにタタール人を上回っているほかは、すべてタタール人がロシア人を凌駕しており、特にタタルスタン在住の両者にその差が顕著に現れている。こうしたタタール人の独自の凝集度を促進する強力な媒体として、ムスリムというきわめて強固な宗教的要因のアイデンティティ形成の準拠枠があることは指摘するまでもないことであろう。いずれにしても、90年代後半から現在に至るまでロシア人は非ロシア人によって「駆逐される」がごとき様相を呈するようになり、さまざまな差別の構図が描かれることになった。こうしてペレストロイカ以降は、ロシア人の間に深刻なアイデンティティ・クライシスが広範にみられるようになる。

それではロシア人は、どのような資質を「ロシア」的なものとして他の民族から自らを区別するものとみなし、アイデンティティの準拠枠にしているのであろうか。「ロシア人を他の民族から区別する資質」として住民全体のポイントの高いランクは以下のようである。（括弧内は％）

1. 困難への耐性（61％）、2. 祖国の価値あるものの保護（49％）、3. スラブの過去、英雄的な歴史（40％）、4. 自由・独立への意志（30％）、5. 偉大な言語（29％）、6. 民族的統一と団結（21％）国家のために個人的利益を犠牲にする用意（同21％）、8. 真理と高次の意味への努力（20％）9. 特別の歴史的使命（12％）、10. 区別するもの無し（6％）、D. K（9％）

職業別にみると、「困難への耐性」は重役・幹部（75％）、コルホーズ等の長（71％）、将校（69％）の選択率が高く、コルホーズ員（51％）で最も低い。コルホーズ等の長はまた「祖国の価

値あるものの保護」(62%)に熱心であり、無職(37%)で最低を示している。「スラブの過去、英雄的な歴史」が最も忘れたくないのは将校(57%)であり、コルホーズ員(32%)はあまり関心を示さない。「偉大な言語」の選択率が高かったのが将校(42%)であったのは当然としても、学生の間でも選択率が高い(37%)ことは注目すべきである。また逆に、本来最も「真理と高次の意味への努力」に燃えていなければならないはずの学生の選択率が最も低い(9%)ことも見逃してはなるまい。男女差はあまりみられず、学歴や年齢層が高くなるほどエスニック・アイデンティティの資質に敏感になるという点で一定の相関が観察される。当然のことながら、新体制に適応しにくい職種や年齢層に、深刻なアイデンティティ・クライシスが観察される。

さらにロシア人自身にとってどのような資質が必須と思われるかということについて調べてみよう。(括弧内は住民全体の%)

1. ロシアを愛し祖国とみなす(87%), 2. ロシア文化、慣習、伝統への愛(84%), 3. ロシア語で話すこと(80%), 4. 自らをロシア人とみなす(79%) 5. ロシアの市民権(56%), 6. パスポートにロシア人の登録(51%) 両親の一方がロシア人(同51%), 8. ロシア人的性格(50%), 9. 正教への信仰(43%), 10. ロシアに居住(32%), 11. 愛国的運動への参加、共感(27%), 12. ロシア人の両親をもつ(24%), 13. ロシア人的容姿(22%)

それぞれの項目における選択率で職業階層ごとの際だった違いはさほどみられないが、「正教への信仰」の指示率が年金生活者でとりわけ高い(55%)ことが目を引く。これらの調査項目においても男女差はほとんどみられない。学歴別では、高学歴になるほどそれぞれの項目の選択率が低下し、知的水準が高い者ほどこれらの要件をロシア人必須の資質としてみていないことを示している。年齢別ではやはり、55歳以上の選択率が高い傾向がみられる。高学歴者は、かつての特権であったロシア人であることをアイデンティティの準拠に用いなくても、新体制に適応してアイデンティティを獲得する確率が高いことが示されている。ただ、2001年7月に「世論」財団が行った「スラブ人的世界観」に関する調査では、地域差が極めて大きいことや、学歴が高くなるごとにスラブ人としてのアイデンティティがより高まる結果も報告されており、この点に関しては今後さらに厳密な調査と分析が必要となるであろう。

先ほどの調査結果の中で、客観的指標よりも「・・愛」といった主観的指標が上位にあることは、ある意味で、現在のロシアにおいてロシア人そのものがおかれている事情を物語っているとも言える。かつて「栄光の」民族であったはずのロシア人としての自己意識の指標は、混迷を極める変動の中でその「誇り」をはぎ取られたというべきか。それまでロシア人が独占してきた特権的地位も新しいエリート層に取って代われ、ますます社会的上位グループと下位グループの差が拡大しており、とりわけ下位グループの新しい生活条件への不適応が顕著となってきた。

こうした社会変動への適応度をみるために、「ロシア居住のロシア人の状況に対する評価」をみてみよう。A.「他の民族と比べてロシア人の経済状態はよくなったと思うか」B.「他の民族と比べてロシア人は現状を改善する可能性が大きいと思うか」C.「他の民族と比べてロシア人への無礼や差別が増えたと思うか」の問いに対して、A、Bではほぼ半数が「変わらず」としているが、全体としては「悪くなった」「少ない」と否定的評価に傾いている。とりわけ、年金生活者、無職、コルホーズ員、コルホーズ等の長、農場経営者の否定的評価は30%前後にも及ぶ。Cについてもほぼ同軌で特に農業関係者が侮辱や差別を受けることが多くなったと感じている。この位相でのアイデンティティ・クライシスは、新体制で著しく不利になった職種(特に農業関係)に集中的に生じている。これらの質問項目では性差、学歴、年齢のポイントの差は比較的少ない。

ある調査によると、ロシアに対する帰属意識を持っているロシア人はほぼ1/3に過ぎないとい



うデータが得られており、その数値は本稿で述べてきたことを裏付けているが、「ロシアで成功するための条件」として低学歴者ほど、ニューリッチ層などに厳しい見方をしているという事実は、逆に彼らに対する羨望の反映とも考えられる。経営者が「手腕」を成功の条件としてあげているのは、従業員、学生、年金生活者、失業者、専業主婦のいずれもが「コネ」を最上位に挙げており、とりわけ、学生の中にこうした見方が強いことは、キャリア・プランによる自己実現の困難さや挫折感とアイデンティティ・クライシスが連動したものと考えられる。

チュプロフなどによる「青年による自分の生活状態の評価とアイデンティティ指標との関連調査」では、完全なアイデンティティ、不安定なアイデンティティ、反分子的アイデンティティのいずれのグループでも、7点中平均値は4前後であり、不安定なアイデンティティ・グループで低い評価に傾いているもののほぼ正規分布に近い。とはいえ、97年と99年を比較してみると、わずか2年間の間に青年のアイデンティティ・クライシスの要素は次のように強まってきている。(97年／99年、肯定率%)「われわれの政治生活においては、私のような者に政治のことを理解するのは難しい」(73.4／81.9)「今日では生活のすべてが保障されている」(73.5／73.7)「今はすべてが今日のことと精一杯で、明日のことなど考える余裕はない」(51.4／64.8)「今は何も信頼できない」(57.0／57.8)「将来が見通せない今、子どもを生む価値はない」(40.7／43.4)。このように現代ロシアの多くの青年は、一応最低限の生活保障はされているものの未来への展望や政治に対する期待もなく、今日を生きるのに精一杯でこんな社会なら子どもを作っても不安でしかたがない、と考えており、その不安は年毎に増加しているといえることができる。

### むすびにかえて

これまで見てきたように、ロシアにおける青年のアイデンティティ・クライシスは重層的構造となっており、今後は、地方自治を含みこんだ「中央—周辺」のダイアドにおけるコンフリクトが進行するであろう。ロシアの地方自治が祖上にものぼったのは僅か10年前のことであり、91年の「地方自治法」の制定をもって嚆矢とする。その意味では地方自治の問題は、まさに「新しくて古い」問題であると言えよう。93年の「ロシア連邦憲法」の第12条で地方自治の承認と保障が謳われ、第130、131、132、133条で地方自治の機構、境界設定、管理、権限、裁判による保護と補償等が規定されている。さらに、95年制定の「ロシア連邦における地方自治の組織化に関する一般原則」においては、教育制度についての言及がみられるとともに、ロシアにおける「地方自治」が、その地方に関連した問題を直接もしくは地方自治機関を通じて解決する、自主的で自己責任に基づく住民の活動と規定している。住民は投票等によって自らの利益・伝統を守るものとし、地方自治権の制限はこれを禁止することが規定された。

こうした動きに対し、2000年3月に正式に大統領に就任したプーチンは、前任者のエリツィンが地方自治を許容しすぎたとの認識から、中央国家権力の集中化を図るとともに、大統領権限の実施を徹底して、連邦国家機関の活動の効率化および管理を強化するための「7連邦管区」を設置した。各連邦管区には、6—18におよぶ共和国、州などの連邦構成主体が含まれており、それぞれに中心都市、大統領全権代表が置かれることになった。つまり＜中央／地方＞のベクトルは、後者から前者へシフトしつつあるということである。今のところは、まだ急激な「パラダイム転換」には至っていない。

とは言うものの、このような動向は当然、学校制度、カリキュラムをはじめとしてさまざまな教育政策に影響を与えないわけにはいかないし、それはまた若者の価値志向性の変化を引き起こすこ

とになる。現に教育における統合へのベクトルは、義務教育年限「12年制」への移行、統一テストの実施という形で着々と進行中である。その一方で、「教育スタンダード」の格差拡大装置としての問題点は依然として解決されていないばかりか、都市への人口流出問題とも相俟って都市と村落との経済格差はますます広がりつつあり、若者の就職状況も悪化の一途をたどっている。

それでは、この変動（激動）する社会にあって、それに適応できる人間とはどのようなタイプなのであろうか。括弧内の前者が最頻のロシア人のモデル、後者が未来志向で積極的に社会に適応していくロシア人のモデルである。性別（女性 / 男性）、年齢（45—54歳、平均47歳 / 25—34歳、平均38歳；勝ち組、35歳；将来性あり）、教育・学歴（低学歴、44%の不完全中等学校以下 / 高学歴、21—25%）、居住地（村落、小都市 / 巨大都市、大都市）、所得水準（副業無しの低所得 / 定期的あるいは副業ありの平均的所得）、社会構造（非熟練労働者の環境での労働者、年金生活者、専業主婦 / 指導者、企業経営者の環境での労働者、無職の場合は学生）、インターン（低レベル / 高レベル）。

この図式でも明らかなように、現代ロシア社会に適応できる人間は圧倒的少数者である。また、学生であること自体は潜在的「適応」タイプに属するが、一旦そこから離れてしまえば（つまり学生という身分でなくなれば）、一挙に不適応グループに併呑される危険性を常にはらんでいる。ロシアでは潜在的失業者としての学生の存在が問題になっているが、本稿での冒頭でも述べておいたようにわが国でも、モラトリアムに起因する青年のアイデンティティ・クライシスが報告されており、ロシアとの類縁性が窺われる。仮令高度な教育を受けたとしても、それにふさわしい労働を提供できない矛盾に満ちた社会は、若者の間に価値喪失と無力感をもたらし、若者の大半は、同世代に対しては「エゴイスティックで統率力に欠け、無関心、無責任」と批判的で、同世代に対する強い不信感を持っている反面、父親や祖父にイメージを重ね合わせた「祖国」（Отечество）の「強いロシア」の復権を夢見る。

ここには、ロシアの青年が政治や教育に対する拭いがたい不信感を持ち、大きな社会変動の中でアイデンティティを得ることのできない苛立ちと憤りが浮き彫りにされており、深刻なアイデンティティ・クライシスの一端を見る思いである。こうした困難な状況下において、それぞれのエスニック・グループがアイデンティティ・クライシスを克服していくためには、アーサー・ミラー描くところのセールスマンのような「過去の栄光の奴隷」の硬直したアイデンティティに陥ることのない柔軟な自己概念を持つことが要求される。国家レベルではいうに及ばず、いずれかのエスニック・グループへの所属を余儀なくされる各個人においても、客観的事実を冷静に受け止め常に未来に開かれた可能性の主体として自らを位置づけることによって、倦むことなく他者との共存の道を探り当てる地道なアイデンティティ形成の作業が不可欠となるであろう。

## 文 献

- 麻生誠，1978『変革期の人間形成』アカデミア出版会  
五十嵐徳子，1999『現代ロシア人の意識構造』大阪大学出版会  
小島弘道・森岡修一，1987『教育原理』日本教育図書センター  
澤野由紀子，1996「ロシア連邦における教育改革の現状と社会主義教育の＜遺産＞」『比較教育学研究22』日本比較教育学会  
澤野由紀子，1998「＜市民社会＞への移行を促す生涯学習体系の構築—ウズベキスタン共和国の教育改革—」『ロシアユーラシア経済調査資料11』ユーラシア研究所  
塩川伸明，1997「ソ連言語政策史の若干の問題」北海道大学スラブ研究センター



- 塩川伸明, 1999『現存した社会主義』勁草書房
- 関啓子, 1997「教育改革と発達文化—エスニシティと教育問題」『ロシアユーラシア経済調査資料1』ユーラシア研究所
- 関啓子, 2002『多民族社会を生きる』新読書社
- 千石保, 1991『“まじめ”の崩壊』サイマル出版会
- 総務庁青少年対策本部編, 1999『世界の青年との比較からみた日本の青年—第6回世界青年意識調査報告書』大蔵省印刷局
- 鯉幹八郎, 1990『アイデンティティの心理学』講談社
- 中内敏夫・関啓子・太田素子, 1998『人間形成の全体史—比較発達社会史への道—』大月書店
- 花崎卓平, 1993『アイデンティティと共生の哲学』筑摩書房
- 深谷昌志, 1994『モノグラフ・小学生ナウ』福武書店(ベネッセ)教育研究所
- 深谷昌志, 1995『モノグラフ・高校生』ベネッセ教育研究所
- 福田誠治, 1999「文化的民族自治」『ユーラシア研究20』ユーラシア研究所
- メシャリコーヴァ, 1995「子ども・学校・児童文化—ポスト・ペレストロイカ期の様相—」『ロシアユーラシア経済調査資料1』ユーラシア研究所
- 森岡修一, 2000「ロシア」(日本教育経営学会編『諸外国の教育改革と教育経営』)玉川大学出版
- 森岡修一, 2000「社会主義」(教育思想史学会編『教育思想事典』)勁草書房
- 森岡修一, 1989a「エスニック言語状況の動態と文化的アイデンティティ」『名古屋女子大学紀要』(以下同), 1989b「エスニシティと文化—都市化における人口移動と民族文化の過程—」, 1990「多文化教育とエスニック・アイデンティティ」, 1992「崩壊するソ連邦におけるエスニック・コンフリクトと教育」, 1994「多民族国家におけるキャリアプランと教育」, 1996「多民族国家における二語併用と言語政策の諸問題」, 1998「多民族国家におけるエスニシティと文化的アイデンティティ」
- 森岡修一, 1996「多民族国家における言語政策とエスニック・アイデンティティ—旧ソ連領の言語政策を中心に—」(水谷修代表『世界の言語問題2』文部省科学研究費報告集)
- 森岡修一, 1996「多民族の言語政策と教育の諸相」(川野辺敏監修『ロシアの教育・過去と未来』)新読書社
- 森岡修一, 2002「道徳性の発達」(柴田義松『道徳の指導』)学文社
- ユーラシア研究所(編), 1998『情報総覧現代のロシア』ユーラシア研究所
- Morioka, S. (森岡修一), 1998, Problems of Language Policy and Ethnic Identity in the Multiracial Nation : Some Phases of Russian Nationalism, GSID.
- Surtherland, J., 1999, Schooling in the New Russia : Innovation and Change, 1984-95.
- ВЦИОМ(VCIOM), 2001, The Russian Public Opinion Monitor, No.4
- Э. Д. Днепров, 1998, Современная Школьная Реформа в России, М.
- В. И. Чупров, 2001, Молодежь в Обществе Риска, Наука
- В. П. Нерознак, 1995, Государственные Языки в Российской Федерации, М.
- РАНИСПИ, 2000. Россия в Поисках Стратегий : общество и власть. М.
- Г. В. Осипов, 1990, Социология. М.
- Т. И. Заславская, 1995, Куда Идет Россия ? М.
- Ю. В. Арутюнян, 1994「Испытание устойчивости нового политического сознания русских (этносоциологическое исследование) ж. Э. О. No. 3
- Л. М. Дробижеева, А. Р. Аклаев, В. В. Коротева, Г. У. Солдатова. 1996, Демократизация и Образы Национализма в Российской Федерации 90-х годов, М.
- В. Н. Иванов, 1999, Россия Федеративная, М.
- В. И. Чупров, 2001, Молодежь в Обществе Риска, М.
- В. А. Ядов, 2001, Россия Трансформирующееся Общество, М.

А. В. Дук, 2001, Региональные Элиты Северо-Запада России, С. П.  
" Народное Образование"1997. 8, 1998. 3,1998. 4, 2000. 7, 2000. 8, 2000. 9, 2001. 2, 2001. 5  
"Педагогика" 1999. 1  
"Политические Исследования"1995. 5  
"Советская Этнография"1978. 1  
"Социологические Исследования"1989. 5, 1996. 2, 1996. 12, 2001.7, 2002.1  
"Отечественные Записки"2001. но. 1, 2002. но. 2, 2002. но. 3